THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報　No.39　2014.5

目次

巻頭言　附属図書館長就任にあたって　1
特集　弘前大学図書館　3
本との出会いを楽しむ<第13 回>　5
図書館に関する話題<第13 回>　6
他大学図書館紹介　7
Library News　9
弘前大学出版会より　10
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧　11

附属図書館長就任にあたって

附属図書館長　郡　千寿子

新しく館長に就任した、郡千寿子と申します。前館長の長谷川成一先生は、６年間、図書館の管理と運営に尽力され、貴重資料の整理や文系図書の充実をはじめとして、数々の新たな事業を成し遂げてこられました。歴代の館長は、大変立派な先生方ばかりですので、私のような者の就任に不安を感じていらっしゃる方が多いかもしれません。しかし、そうした周囲の声を逆手にとって、頼りない未熟な館長を何とか手助けしなくてはいけない、と思ってくださる教職員の支援者を増やしつつ、自分なりのスタイルを模索したいと思っています。

みなさんにとっての“図書館”は、どんなイメージがあり、またどんな役割をもった場所でしょうか。私にとっての図書館は、探検する場所であり、思索する場所であり、癒される場所でもありました。全国の国立大学の附属図書館は、教職員の証明書を示せば、いつでもどこでも出入りが許されるシステムになっています。ですから、学会や会議で出張すると必ず、近隣の大学附属図書館に立ち寄り、探検することが私の楽しみのひとつになっていました。図書館には、その大学の個性や姿勢が凝縮されているという側面があります。どういった分野の図書の所蔵が多いか、書架の配置や広報のあり方はどうか、厳粛で静かな図書館か、明るく利便性のある図書館か、などなど、図書館内には、それぞれの大学によって違う空気が流れています。つまり、図書館ごとの個性があり、雰囲気があるといえるでしょう。

図書館という器、つまり建物だけでなく、中にいるスタッフや利用者の様子によってもその空気感は左右されます。親切で愛想のよい図書館員がいるかと思えば、厳格に管理をしっかりとする図書館員もいらっしゃいます。また、雑誌コーナーがにぎわい、楽しげに利用している方もいれば、一心不乱に勉学に勤しんでいる学生の方もいる。どのように図書館が管理運営され、また利用者がどのような姿勢でその図書館を使っているか、といった要素にも、図書館の雰囲気、ひいては図書館での居心地の良し悪しが変わってくるように思うのです。

管理運営する側と利用する側は、決して分化できるものではなく、その両者が一体となって附属図書館が存在するのではないでしょうか。現在改修中の本学図書館は、10 月にリニューアルオープンの予定です。建物が改修され、新しい姿を現します。その機会に外見だけでなく、中身や雰囲気、利用者の意識も、みなさんと一緒に再構築できないかと思っています。

どういった立場の人―管理する人、利用する人―も、図書館の居心地の良し悪しを左右する、その一翼を担っています。それを自覚し、それぞれの立場においての図書館像について再検証してみてください。

私は、図書館内の参考図書コーナーに並ぶ、日本最大の国語辞典『日本国語大辞典　第二版』（全十四巻）の語誌執筆や編集に携わるなど、日本語史を専門としています。職業柄、図書館には、何かの調べものがあって資料を探索しに行く場合もありますが、必ずしも目的があるとは限りません。疲れたとき、ふと図書館に足を運び、何も考えずにふらふらと館内の図書の背表紙をながめていることもあります。たくさんの本に囲まれた静かな空間で、行き詰った研究論文の続きを思考しつつ、ぼんやり過ごすこともあります。どちらかといえば、自分のなすべきことを確認する空間として、気分転換する場所として利用してきたことが多いかもしれません。目的のあるなしを問わず、また私の気持ちの浮き沈みに関わらず、図書館はいつも、しっかりとそこに存在し、望むときに望むように受け入れてくれる場所でした。

再度、みなさんに問いかけます。みなさんにとっての“図書館”は、どんなイメージがあり、またどんな役割をもった場所でしょうか。あるいは、どんな図書館にしたいでしょうか。図書館の目指す姿とはどういうものでしょうか。さまざまなご意見を参考にしながら、弘前大学ならではの雰囲気を醸し出せる、より良い図書館を一緒に作っていただきたいと願っています。どうかみなさんのお力をお貸しください。

新米館長は、図書館職員に支えていただきながら、そして利用者である教職員と学生のみなさんに教えていただきながら、日々奮闘努力したいと思います。

（こおり　ちずこ）